

無職（仁乃のお兄ちゃん）

躊躇口

「それじゃあ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。夜更かしはほどほどにね？ またねー」

少女は配信を切り、パソコンの電源を落とした。それからふう、とため息をつく。マネージャーに「配信終わりました」とメッセージを送った。弁護士からの進捗はまだ届いていない。少し苛立つて机を数回指で叩いたが、玄関の鍵が回る音ですぐにやめた。少女は玄関に駆け寄った。玄関に情けなく腰を下ろした兄を支えるためである。少女は兄のそばにしゃがみ、兄の肩を支えた。

「おかえりなさい」

配信の時の潑刺な声とは違う、兄だけに見せる甘く蕩けるような声だった。兄は肩をぴくりと震わせて、そこでもうやく、顔を上げた。暗がりでもはっきりと分かるほど、目の下のクマがひどかった。頬はまた痩せている。

「ただいま……」

兄の声は力無く、か細かった。一八〇センチあるとは到底思えない。少女は兄の手を握って、そっと立ち上がらせた。妹の手を借りないとろくに立てないし、歩けない。そんな兄のことを、少女は愛して

いた。同時に、兄をこんなにぼろぼろにした「世界」を恨んでいた。

「ご飯、できているよ。温め直すね」

少女はラップされた肉じゃがをレンジに入れ、その間にご飯と味噌汁を器によそった。高校二年生の少女が、兄のために愛を込めて作った夕飯だった。兄はダイニングテーブルに座ったまま、全く動かなかった。ぼーっと壁を見つめている。いつものことだった。

「はい。食べられるだけで、いいからね」

少女は兄の前に夕飯を出し、向かいに座った。いつの間にか淹れたカモミールティーを傍に置いて、頬杖をついて兄を見つめた。兄は小さく、「いただきます」と呟いて、震える手で箸と茶碗を持った。肉じゃがを一口食べると、「おいしい」と声がこぼれた。少女は満足げに笑って、足をパタパタ揺らしながら喜んでいた。兄においしいと言われることが、少女にとって最も幸せなことのひとつだった。

「食べたら、お風呂入ってね。追い焚き、するから」

兄はこくりと頷いた。そんな姿にまた、少女は笑みを浮かべた。

兄の風呂はおぼつかない。時々どこかに体をぶつけたような鈍い音がして、痛みに悶える兄の声が微かに聞こえてくる。本当は頭も体も洗ってやりたい

が、流石にそこまで踏み込むことはしなかった。今は、の話であるが。

兄が風呂に入っている間、少女は明日以降のスケジュールを念入りに確認していた。マネージャーからの連絡を念入りに読み返す。

少女は今話題のブイチューバー、「万丈目にの」として活動していた。「みんなの妹」という設定の容姿と話し方は、癒しに飢えた二〇代以降のオタクにヒットした。明日も二十一時から深夜まで雑談配信がある。トークテーマは定番の、「にのに何でも教えてね」である。にのが答えられる限り、ファンのお悩みを聞くことになっている。常に赤スパが飛び交い、我こそはとファンがお悩みをぶつけてくる。ある種の宗教であった。

兄が風呂から帰ってくる音がして、慌ててスマホを部屋にしまう。鍵付きの引き出しに、念入りに、である。少女が「万丈目にの」として活躍し、膨大な資産を築き上げつつあることは、まだ兄には知られてはいけない。

頭を乾かさないうままソファに座り込んだ兄を見て、少女はドライヤーを手を取った。兄はぼーっと壁を見つめたまま、妹にされるがままになっていた。

「今日もお疲れ様」

返事は期待していなかった。答えてもらえなくて

も仕方ないとすら思っている。兄は心底疲れているのだ。疲れすぎて、その日のうちに回復できない。仕事以外では思考も舌も回らない。いつ自殺してもおかしくない。そんな状態である。それでも毎日死なずに帰ってくるのは、まだ高校生の妹のためであった。両親を失った妹に、自分まで失わせたくない。その一心であった。

少女は兄の髪の毛を乾かし終え、歯磨きをするように促した。口の端から涎と歯磨き粉が溢れ、その都度甲斐甲斐しく拭いてやった。側から見たら赤子と母親である。二六歳と十七歳の兄妹とは思えない。

歯磨きを終えた兄を部屋まで導き、ベッドに寝かせてやった。残念だが、明日も兄には「朝」がやってきてしまう。少女はそれを悔しく思った。兄を苦しめる全てを消したいと、本気で思っていた。

「それじゃあ、おやすみなさい。また明日」

少女はばかり、と部屋の電気を消して、静かに兄の部屋のドアを閉めた。自室に戻ってスマホを見ると、通知が数件あった。弁護士からである。少女は内容を見て、ふふ、と笑みを溢した。いわゆるチェックメイトに差し掛かっていた。

「では、朝イチで動いてください。お願いします」

そう返信して、くくくと肩を震わせて笑った。少女はゲーミングチェアに体重をかけ、「お兄ちゃんノ

「ト」を見返した。物心ついた時からつけている、兄の全てが記されているノートである。苦節三年。紆余曲折あったが、ようやく達成される。お兄ちゃんノートに貼られた無数の兄の写真を丁寧に撫で、「もう少しだからね」と呟いた。

翌朝、兄は雀の鳴き声で目を覚ました。だるい体を無理やり持ち上げると、カシャン、と音がした。それから遅れて、左手首の痛みに気がつく。黒い手錠がかけられており、引つ張ったせいか手首に食い込んでいる。手錠の片側はベッドフレームにかけられていた。とても外せそうにはない。

兄の頭には「？」が無数に浮かんでいた。もう一度、ここが自室であることを確かめる。カーテンを閉め切った窓、妹が掃除してくれるおかげで整然とした机や棚、妹がハンガーにかけてくれたスーツ。間違いなく自室だった。

最後に時計を見ようとした。が、いつもあるはずの目覚まし時計がどこにもなかった。今何時かわからない。急に背筋が冷えた。早く会社に行かなければと、慌ててスマホに手を伸ばす。目を擦って何度も画面を見た。午前十時。当然大遅刻である。

しかし、上司からの鬼電や脅迫まがいのメッセージはない。何かがおかしい。夢の中にいるのだろうか。

か、と思って頬をつねった。ちゃんと痛かったのので、余計に気味が悪くなった。

パタパタと音がして、兄はスマホから顔を上げた。少女はトレイに紅茶とスコーンを乗せて、にこりと笑って立っていた。

「お兄ちゃん、おはよう」

兄は絶句した。何から聞くべきかわからず、数十秒妹を見つめていた。

「仁乃」

口から出たのは少女の名前だった。春井仁乃。高校二年生。春井一織の妹。たった一人の妹である。

「よく眠れた？」

少女は何でもないみたいに振る舞った。サイドテーブルにトレイを置いて、「どうぞ」と笑って紅茶を差し出す。兄はそれを受け取らず、ごくりと唾を飲み込んだ。何が起きているのか分かっていない。

「な、なあ。仁乃がやったのか？　こんなこと」

手錠を一瞥して、それから妹を見つめた。怒らないから話してくれ、な？　と懇願する。無理して笑ったせいで、口元が引き攣った。少女は回転椅子に座ってにこりと笑う。

「うん。全部私がやったの」

スコーンを割って、ママレードジャムを塗る。それを一口食べて、「おいしい」と無邪気に笑った。

兄はスコーンにも手をつけられなかった。状況を飲み込むのに精一杯だったからである。

「まず、一つ目。お兄ちゃんは今もう、働かなくてよくなりました」

「は？」

信じられない、という顔をした。俺が働かなかつたら、仁乃はどうなる。この家は、暮らしはどうなる。兄は混乱して、頭を抱えた。少女はしばらく、兄が落ち着くのを待っていた。時間はたつぷりあるとでも言うように、優雅に紅茶を飲む。

「調査、報道、取引停止……数週間前から少しずつ、会社が崩れていったの、知らなかった？ お仕事に夢中で、気が付かなかったかもしれないけれど」

兄は必死に社内の異変や違和感を思い出そうとしたが、浮かんでくるのは月何百時間も向き合ったパソコンの画面のみであった。上司に押し付けられる仕事をひたすら処理し、度がすぎる人格否定には俯いて耐え、申し訳ありませんという言葉を祈るように繰り返す。だから、気付きもしなかった。

「それで今日、ついさっきのこと。ふふ、ネットニュースにもなっているんだよ」

少女は楽しみにネットニュースを見せる。【速報】クロス社、本日付で全事業停止 パワハラ問題で経営陣総辞職——兄はその文字を二、三回読み返し

たが、訳が分からなかった。あり得ない。幾度も辞めようとして阻まれ丸められ、ついに諦めた会社が高校二年生の妹の手によって滅んだと言うのか。

「だからお兄ちゃんは今から、『仁乃だけのお兄ちゃん』ですっ」

少女は兄の手をそつと握った。目を細めて、愛おしそうに笑った。兄は青ざめていた。自分は妹を守っているつもりになっていただけで、むしろ守られていたのだ。

「それから、二つ目。収入には問題ありません」

少女は自身の銀行通帳を開いてみせた。兄はそれを見て、桁数を数えた。一、十、百、千、万。それから先を数えようとして、目が滑ってしまった。

「こ、こんなお金、どうやって」

兄は青ざめたまま震えた。妹が何か危ない仕事をしているのではないかと思ったのだ。自分は今、妹に養われようとしている挙句、妹を危険に晒している。生きる意味を見失ってしまいたいそうだった。

「お兄ちゃんには秘密にしていたのだけれど、私、配信でお金を稼げるようになったの」

少女は顔を赤くして、見せるかどうかを迷っている。兄は口を開けて、途方に暮れていた。

程なくして、少女のスマホに「万丈目にの」のYouTube チャンネルが表示される。登録者は百万人

を超えており、直近の配信の視聴回数は全て二十万回以上を叩き出していた。うさ耳がついた、ピンク髪のが可愛らしい女の子が喋ればチャットはすぐに動き、目で追えない早さになった。赤スパも常に飛んでいる。その額にめまいがしそうだっただけ。

「週三、四回配信をしていて、グッズの売り上げも順調なの。今度、有名なボカロロさんに新曲を作ってもらえることになったんだ」

妹の言っていることは分かる。兄もブイチューバーの配信を見たことがあったし、好きなブイチューバーもいた。けれど、妹がブイチューバーをやっている、自分の年収を裕に越えていることだけは理解できなかった。理解を拒んでいたのかもしれない。

「なので、これからの生活に何も心配はありません」兄の目からは光が失われ始めていた。絶望で心身が消耗していた。妹に「何勝手なことしてるんだ」「どうして今まで黙っていたんだ」「学校はどうしたんだ」等、言いたいことは無数にあった。けれど、全て泡のように浮かんでは消えた。

「最後に、三つ目。私、お兄ちゃんとずうっと一緒にいたい。だから、こんなことしちゃいました。ごめんね」

少女は上目遣いで兄を見つめた。兄はそれを見て、完全に脱力した。ああ、と呟いて虚に天井を見つめ

る。兄は賢かった。ゆえに、自分が何を言っても無駄だと思ったのだろう。兄としてのプライドを粉々にされてしまった今、妹に言えることはなかった。「もう、お兄ちゃんを脅かすものは何にもありません。だから、安心してね」

「はい、あーん……」と目を細めてスコーンを差し出した。兄は生気の消えた顔のまま、ほんの少し口を開けて、スコーンを受け入れた。ほのかに甘くて美味しいはずなのだが、兄は味覚が死んでいた。じやりじやりと砂を食うような感覚だった。

「あ、トイレとかお風呂とかの時は、外してあげるから。言っただけ？」

兄は砂のようなスコーンを咀嚼したまま、こくりと頷いた。それから、妹の顔を見た。

「そ、そんなに見つめられたら、恥ずかしいよ……」少女は乙女のように恥じらった。兄はそれをぼんやりと見つめていた。

「……いつから、動いてたんだ」

兄はぼつりと呟いた。それは責めるような意味ではなかった。むしろ、妹を心配していた。いつから、こんなことをさせてしまっていたのだろう。なのに自分は、妹のやっていることに気付かず、毎日ろくに会話もしてあげられず、死んだように生きていた。それがたまたまなく悔しくて、情けなかった。

「三年前。パパとママが死んで、二人だけになったでしょう。お兄ちゃんは、もともっと働かないといけなくなつて……一方的に搾取され始めて……許せなかったの」

少女は、初めて兄が終電で帰ってきたときのことを思い出していた。あの疲れ切った、何もできないと言ふような顔を見たあの日、元々兄でいっぱいだった頭が、さらに兄に支配された。

「この三年間、コツコツコツ頑張つて……やつと！ 今日！ お兄ちゃんを助けることができたの」少女は達成感と満足感に包まれていた。恍惚とした笑みを浮かべた妹を、兄は化け物を見るような目で見ていた。

「……そんなに、前から」

「あ、お兄ちゃんのこと大好きなのは、生まれたときからだからね」

そんなことは今聞いていない、と兄は眉を顰めそうになった。表情筋すら死んでいて、無表情で妹を見つめることしかできない。

「今は、受け入れられなくてもいいよ。お兄ちゃんにとつて働くことは、呼吸することと同じことだったんだもの。でもね？ これからは、もう大丈夫だから。働いていなくても、お兄ちゃんは仁乃の、大事な大事な『お兄ちゃん』なんだよ」

妹は兄を抱きしめた。兄は全てを妹に預けた。とりあえず、今はそうしていよう。そうするしかない。妹の本気を見せられた今、兄は何をしても妹に及ばない予感がした。

「……ああ」

兄は妹を見た。妹の潤んだ瞳の中に、自分がいた。酷い顔をしている。

処理落ちか、安心感か。瞼が重たくなつて、兄は眠りについた。少女は兄の頭を撫でて、頬を撫でて、それから部屋を出た。

「ふんふんふーん」

全てうまくいく。仁乃が一織の妹として生まれたあの日から、失敗したことはなかった。

「お兄ちゃん救出計画、完遂、つと……♡」

少女は自室のカレンダーに、ピンクのマーカーでハートを書いた。それからうさぎのエプロンを身につけて、昼食の準備に取り掛かった。